

論文 他出者のUターンに至るまでの経緯と  
Uターン者の次世代育成等の地域での役割  
－島根県川本町のUターン者へのインタビュー調査を事例に－

貫田 理紗・有田 昭一郎・東 良太

島根県中山間地域研究センター研究報告第17号別刷

令和3年10月

# 他出者の U ターンに至るまでの経緯と U ターン者の次世代育成等の地域での役割 — 島根県川本町の U ターン者へのインタビュー調査を事例に —

貫田 理紗・有田 昭一郎・東 良太

Process of No-Residents of Family Members Leading to U-Turns and  
U-Turner's Role in the Region such as Nurturing the Next Generation  
— A study of Interviews with U-Turners on Kawamoto Town, Shimane Prefecture —

NUKITA Risa, ARITA Shoichiro and AZUMA Ryota

## 要 旨

多くの中山間地域では人口減少が進行しており、集落を維持するための担い手不足が深刻である。とくに進学や就職を機に他出する者が多く、U ターン促進策の検討は重要な課題である。また、U ターン者は出身地で居住していた経験を持つため、I ターン者には期待できない地域活動における役割を担っていると考えられるが、その実態は十分に把握されていない。

本研究では、U ターンの経緯と地域活動における役割を把握するために島根県川本町内の U ターン者に対してインタビュー調査を実施した。調査結果から U ターンに至る経緯として、①他出前の自然体験や地域行事の経験および地域住民との関係性の構築、②他出後の出身地の魅力の発見・認識、③U ターンの検討、の 3 つの要素が確認された。また、U ターン者は次世代育成に積極的な姿勢がみられ、子ども達のふるさとへの愛着や誇りといった出身地に対する帰属意識の形成に影響を与えていると考えられた。したがって、今後 U ターン促進に向けては、他出前に出身地に対する帰属意識が形成されることに加えて、U ターン後には次世代の帰属意識の形成を担う循環を創り出すことが必要であると考察された。

キーワード：移住、人材環流、出身地に対する帰属意識

## I はじめに

### 1. 問題背景

日本各地で人口減少が進む中、各地の自治体で移住・定住施策を含む事業が充実しつつある。2010 年頃から「田園回帰」という言葉に表されるように、都市に住む若者が農村への関心を高め、新たな生活スタイルを求めて農村部へ移動する、もしくは都市と農村を行き交う動きがみられるようになった<sup>[1]</sup>。

その中には、出身地ではない地域での居住を選択する I ターン者と、一度は出身地を離れたもののその後出身地へと戻る U ターン者が存在する<sup>[2]</sup>。

U ターン者は、U ターンを検討する際に地域住民や親族からの情報提供を受け取る可能性が高く、I ターン者が移住の検討を進める際に課題とされている仕事・住まい・地域コミュニティとの関係の 3 つの要素<sup>[3]</sup>が障壁となる可能性は低いと考えられ

る。したがって、自治体の移住相談窓口を経由せずにUターンする者も多く<sup>[4]</sup>、Uターン者が移住に至る経緯はIターン者以上に十分な把握が難しい。一方、Uターン者は出身地で居住していた経験を持ち、かつ一度出身地以外での暮らしを経験している。そのため、Iターン者には期待できない地域活動における役割を担っている可能性があり、改めてUターン者の役割や意義を整理することが必要である。

## 2. 先行研究の整理

江崎ら(1999)は、国立社会保障・人口問題研究所が実施する「人口移動調査」により、Uターンを研究する上で必要な基礎的なデータは把握されつつある、と述べている。しかし、Uターンをした年代や移動前後における生活条件の把握はされておらず、Uターンの発生要因などに関する詳細な分析が今後必要であることを指摘している。

その後、Uターン者の増加の要因と、地域や行政の取組の関係を整理した研究(岡崎ら, 2004)や若年層に着目し、Uターンを促進する要因とその形成プロセスを把握することを目的とした研究(齋藤・佐藤, 2019)など、Uターンに着目した研究が蓄積されつつある。

一方、Uターン者の地域活動における役割についての研究は乏しいが、樋田(2020)はUターン者の性質について注目した研究を行っている。この研究の中でUターン者は、地元住民であると同時に他出経験を持つよそ者であるという両面性を兼ねそなえていること、そしてUターン者は地域住民性(=同質)とよそ者性(=外部)の双方を持つ貴重な存在であることが指摘されている。ただし、樋田(2020)の研究はUターン者の中でも、実家の工務店や美容室などの家業継承者としての役割に限定したものであり、地域づくり全般における役割に注目したのではない。

そこで、本研究では既往研究で整理されつつあるUターンの要因や、Uターン者の性質の議論をふまえ、他出からUターンに至るまでの経緯および地域活動における役割を把握するためにインタビュー調査を実施した。

## II 島根県および川本町の転出入の状況

### 1. 転出入者の推移

図1は島根県への転入数、島根県からの転出数および転出入の差を表しており、18~25歳の転出が多い。

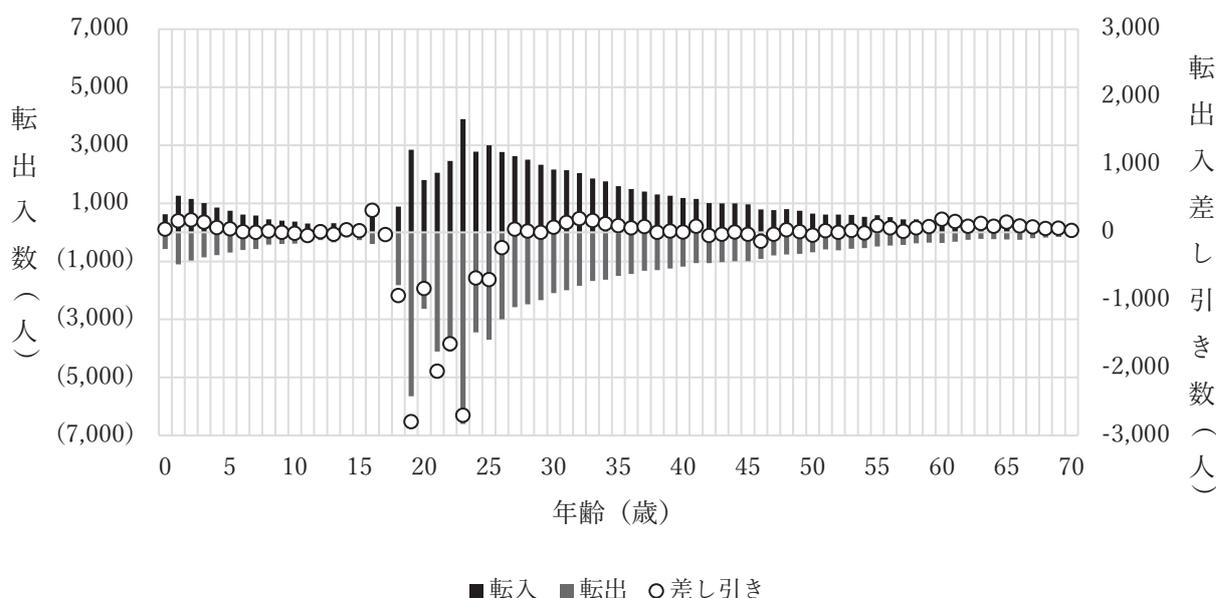


図1 島根県内の転出入の状況

注：島根県人口移動調査(2013~2019年)を基に作成

特に19歳時の転入数が2,850人に対して、転出数が5,648人(差は2,793人)、そして23歳時の転入数が3,899人に対して、転出数が6,601人(差は2,702人)であり、進学・就職をきっかけとした転出者が多く存在していると考えられる。また、県外からのUIJターン者の総数は2016年以降減少傾向である。2015年のUターン者は2,462人であり、2019年は2,029人、Uターン者の数は年々減少傾向にあることがわかった(図2)。各市町村の転入者の内訳をみると、松江市や出雲市などの全8市は相対的にUターン者の割合が高く、奥出雲町、隠岐の島町もUターン者の割合が高い。一方、川本町、西ノ島、知夫村はUターン者の割合が低く、Iターン者の割合が高い(図3)。

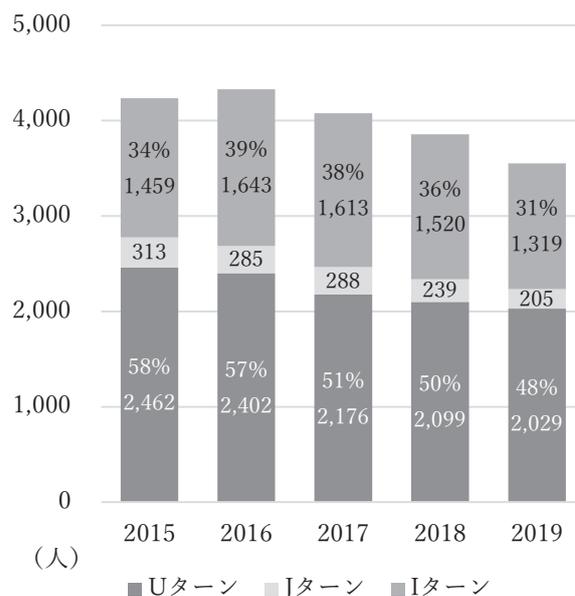


図2 県外からの転入者数の内訳

注：島根県人口移動調査(2015～2019年)を基に作成

## 2. 川本町の移住支援

本研究で対象とした川本町は、人口3,177人、世帯数1,652戸(2021年6月末現在)、全域中山間地域に指定されている<sup>[5]</sup>。

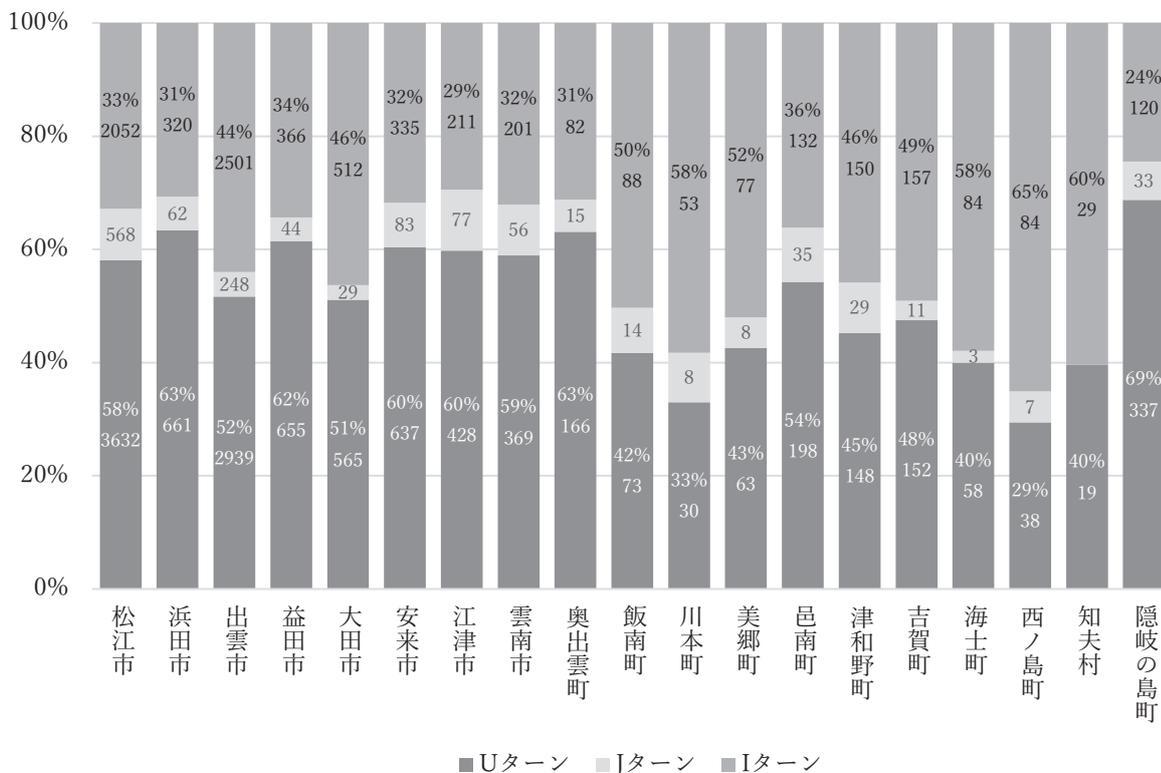


図3 島根県内各市町村の転入者の内訳

注：島根県人口移動調査(2015～2019年)を基に作成

同町は島根県のほぼ中央に位置しており、出雲市、浜田市、江津市、大田市まで車で1時間程度の距離にあり、広島市内まで1時間半程度の距離である。町内に高校卒業後の進学先、就職先が乏しいため、進学や就職を機に他出する者が多い。

本研究では、進学・就職を機に他出する者が多いという中山間地域の典型的な課題を持つ島根県川本町のUターン者を対象として調査を行った。同町では、Uターン者、Iターン者への支援制度として、移住希望者の仕事、住まい、子育てに関するあらゆる相談に専任のスタッフが対応する専門窓口を設置している。また、起業や就農の支援制度、新築や中古住宅の改修支援に加え、町内での実際の暮らしを感じることができるよう「かわもと暮らし体験プログラム」や「川本町就農体験プログラム」を実施している。このように、移住希望者に対する支援制度は充実しており、同制度を利用した移住者も多い。

### Ⅲ Uターン者へのインタビュー調査結果

#### 1. 調査の概要

インタビュー調査は次の項目で実施した。

調査項目：家族構成、他出した理由、他出先、Uターンの動機、Uターン年、他出前の出身地に抱いていた印象、Uターン後の地域活動への参加状況等

調査対象：川本町出身で進学や就職を機に県内他市町村もしくは県外に他出し、Uターンした者対象者

抽出方法：機縁法<sup>[6]</sup>

調査方法：半構造化インタビュー<sup>[7]</sup>

調査時期：令和2年9月～12月

対象者数：15名

#### 2. 調査結果

##### 1) 調査対象者の概要

##### ①調査対象者の属性と他出に関する家族の要望

対象者は世代ごとの特徴を明らかにするため20～70代のUターン者を選定した(表1)。兄弟・姉妹構成については長男や長子が多いが、インタ

表1 インタビュー対象者の属性

対象者	現在の年代	兄弟・姉妹の構成
A	20	次男
B	20	三男
C	30	長男
D	30	長女
E	30	長男*
F	40	三男
G	40	長男
H	50	長男
I	50	長男
J	50	長女*
K	50	長女*
L	50	長男*
M	60	長男
N	60	長男*
O	70	四女

注：\*は長子を示す。

ビュー調査からは「長男もしくは長子なので川本町に残ってほしい、いずれは帰ってきてほしい」という家族や親族からの直接的な要望を受けた者はいなかった。ただし、直接的な要望はなかったものの、長男としての家を継ぐことを意識していたものは存在する(対象者N)。また、表3で後述するように、Uターンの動機に家族が関連する者は長男、長子が多い(対象者E・H・J・L・N)。

##### ②他出状況

他出時の年齢についてみると、高校を卒業する時点が多かった(表2)。対象者C・F・Hについては高校への進学時、そして大学等への進学時と2回の移動の機会があった。また、対象者E・Lは大学等への進学時と就職の2回の移動の機会があった。

他出時の思いについては、「町内で暮らしたくない」といった出身地への消極的な印象を抱いていた者は対象者D・Kのみであった。いわゆる田舎の閉塞感や、一個人としてではなく“家”の一員として評価されるという認識が出身地への消極的な印象につながっており、進学・就職を機に出身地を離れたいという強い思いを持っていた。

表2 他出状況

対象者	他出理由	他出時の思い	他出年齢	他出年	他出先	他出前Uターンの意向
A	進学	進学のためやむを得ず いずれは町内で暮らしたい	18	2012	広島	有り
B	進学	憧れがあり都会で暮らしたい	18	2010	松江	無し
C	進学→進学	一度は県外で暮らしたい	15・18	2003	江津→九州	有り
D	就職	県外で暮らしたい 町内で暮らしたくない	18	2001	四国→九州	無し
E	進学→就職	進学のためやむを得ず	18・22	1996	松江→広島	有り
F	進学→進学	県外に出るのが当たり前	15・18	1995	浜田→大阪	無し
G	進学	一度は町外で暮らしたい	18	1986	大阪	有り
H	進学→進学	一度は町外で暮らしたい	15・18	1986	浜田→松江	有り
I	進学→就職	一度は町外で暮らしたい	18	1986	新潟	有り
J	就職	明確な思いはない	18	1986	愛知→兵庫	無し
K	進学	県外で暮らしたい 町内で暮らしたくない	18	1986	広島	無し
L	進学→就職	明確な思いはない	18・22	1985	広島→松江	無し
M	進学	明確な思いはない	18	1979	山口	無し
N	就職	就職のためやむを得ず	18	1978	広島	有り
O	就職	明確な思いはない 県外に出るのは当たり前	18	1968	大阪	無し

対象者D・K以外は「川本町を離れるのは当たり前」という家族・親族といった周囲の意見や「都会への憧れ」、「一度は県外へ出てみたい」という一次的な他出意向を持ちながら他出する選択を選んでいた。また、他出先については、県内は松江市が多く、県外の他出先は西日本、とくに広島県が4名、大阪府が3名と多かった。

他出前、Uターンの意向があった者は対象者A・C・E・G・H・I・Nの7名であった。対象者B・F・J・L・M・Oと、出身地への消極的な印象を抱いていた対象者D・KはUターンの意向はなかった。

### ③Uターンの状況

Uターン時の年齢は20代が多く、他出期間は10年未満が多かった(表3)。Uターンの動機は、当事者自身が他出先と出身地での暮らしを比較したことで、出身地に戻り生活することを前向きに検討し

た「自発的な要因」は7名、長男だから、家族の事情や意向など「他発的な要因」は8名にみられた<sup>[8]</sup>。④出身地への印象とUターン後の地域活動との関わり

他出前の出身地への印象については、出身地の自然環境、同級生や地域の大人との接点について好意的な印象を抱いていた者が5名(対象者B・C・I・J・O)、また、対象者A・E・G・Mのように「悪い印象はない」、「特別な思いはない」という回答もあった(表4)。

Uターン後の出身地への印象・地域との関わりについては積極的な印象を持っている者が多く、対象者B・Gのように「自分が子どもの頃に経験したこと、大人世代から教えてもらったことを今の子ども達に伝えたい」という次世代育成の思いを持っている者がみられた。

表3 Uターンの状況

対象者	Uターンの動機	動機の分類	Uターン年	Uターン時の年齢	他出期間
A	就職，川本町での暮らしの方が落ち着くから	自発的	2016	22	4
B	都会で暮らすイメージが持てないから 地元への恩返しがしたいから	自発的	2014	22	4
C	就職のため	自発的	2013	23	7
D	仕事を続けていくイメージが持てなくなったから	自発的	2012	30	11
E	家族の病気（怪我）のため	他発的	2009	27	8
F	住み慣れた実家の方で暮らしたいから	自発的	2006	26	6
G	就職のため	自発的	1996	20	1
H	両親の健康状態の不安	他発的	1996	26	5
I	就職のため	他発的	1990	22	4
J	両親の健康状態の不安から	他発的	1993	26	7
K	家族からの強い思いから	他発的	1989	22	3
L	親のことが心配だから	他発的	1993	28	9
M	県外にいることのこだわりがなくなったから	自発的	1987	27	8
N	長男だから	他発的	1979	20	1
O	家族の病気のため	他発的	2015	65	47

注：対象者Iは、県外での勤務を希望していたが、本人の意向に反し、初任地が川本町であったため、他発的な要因に分類した。

また、対象者Cのように「地域行事の必要性を認識した」「地域のつながりの強さを実感した」といったUターン者自身と地域住民や地域活動との接点を見直す変化がみられた。

## 2) 調査結果の分析

### ①Uターン者の性質

先述したように、他出前の出身地への印象については、「悪い印象はない」「特別な思いはなし」といった回答が多かった。他出するまでは比較する対象がなく、他出先での暮らしを経験することで、他出中やUターン後に出身地の魅力に気づくことができていた者がみられた。このように、他出をきっかけに出身地の魅力を認識していると考えられた。

また、「子どもの頃に世話になっていた大人がい

るので、自治会などでも意見が言いやすい」「自身が地域の大人に面倒をみてもらっていたこと、経験したことを今の子ども達にも経験させてやりたい」という発言があった。Uターン者は他出前の地域住民との関係性を活かしてUターン後の地域活動に関わっていること、そして、他出前の地域の大人世代との接点が次世代育成への思いに繋がっているという特徴が明らかとなり、Iターン者には期待できないUターン者の地域活動における役割が確認された。

### ②Uターン時の情報源

他出時については年に数回の帰省のみである者がほとんどであり、Uターンを検討する際の仕事に関する情報源は家族が多かった。

表 4 他出前と U ターン後の出身地への印象と U ターン後の地域活動との関わり

対象者	他出前の出身地への印象	U ターン後の印象・地域活動との関わり
A	悪い印象はない	落ち着くのは川本
B	野球で同級生や地域の大人とのつながり強い	同級生が多く戻ってきている 野球を通じて下の世代とも積極的に関与【P】
C	自然の豊かさ	地域行事の必要性を認識【P】
D	閉塞感や田舎のわずらわしさを感じていた【N】	地域住民とのつながりの中で自分の役割を再認識【P】
E	悪い印象はない	落ち着くのは川本 子ども向けの活動を企画するグループに参加【P】
F	同級生の人数も多く賑わっていた、 悪い印象はない	同級生も少なく、人口も減少し寂しい印象【n】
G	特別な思いはない	スポーツや自然の遊び等、自身が教えてもらったことを子どもたちに教えたい【P】
H	悪い印象はなし	地域のつながりの強さを実感【P】
I	同級生との仲間意識が強かった	不便でもあるが生活には困らない 心が落ち着いて、ゆったりと過ごすことができる
J	地域の大人が面倒をみてくれていた 良い思い出が多い	子どもの頃から知っている人や気心が知れた人が多く、 地域活動などやりくにくさがない【P】
K	田舎のわずらわしさを感じていた【N】	子ども達と関わることや自身の子育てを通じて都会にはない良さに気づく【P】
L	田舎ではあると思っていたが過疎という印象はない、交通の不便さは感じていた	人口が減少し、寂しくなったという印象がある【n】 不便さはあまり感じていない
M	楽しく生活していた思い出はあるが、特別な思いもなし	都会は遊びに行く場所、 住んでみると川本が良いと再認識
N	自然の豊かさ、不便	地域住民が声をかけてくれる温かさを感じる【P】
O	川本のことは好きだった	川本は人間らしい生活ができるが通院は不便【n】 前職の経験を活かしサロン活動に関与【P】

注：【N】は他出前の消極的な印象 【n】は U ターン後の消極的な印象

【P】は地域活動への参加や地域住民とのつながり、次世代育成に関する積極的な思いを示す。

出身地での生活環境を把握していることは移住時の利点になる一方で、他出後から U ターン検討期間中の出身地に関する情報が更新されにくい可能性が考えられた。したがって、他出時や U ターン検討時の情報の伝え方を検討する必要があると推察された。

### 3. U ターンに関する要素の整理

今回の調査結果から、U ターンの経緯を整理すると、以下の①～③の U ターンに至る 3 つの要素が存在していると考えられた (図 4)。①他出前の出身

地での自然体験や地域行事の経験および地域住民との関係性の構築、②出身地の魅力の発見・認識、③自発的・他発的要因による U ターンの検討である。①、②、③を順に踏む者もいれば、①、③、そして U ターン、また U ターン後に②出身地の魅力の発見・認識をすることで U ターン後の地域活動における役割の発揮 (地域活動への参加) につながる者も存在する。④地域活動への参加は全ての対象者にみられたわけではないが、「子どもの頃に世話になっていた大人がいるので、自治会などでも意見が言いやすい」「自身が地域の大人に面倒をみてもらって

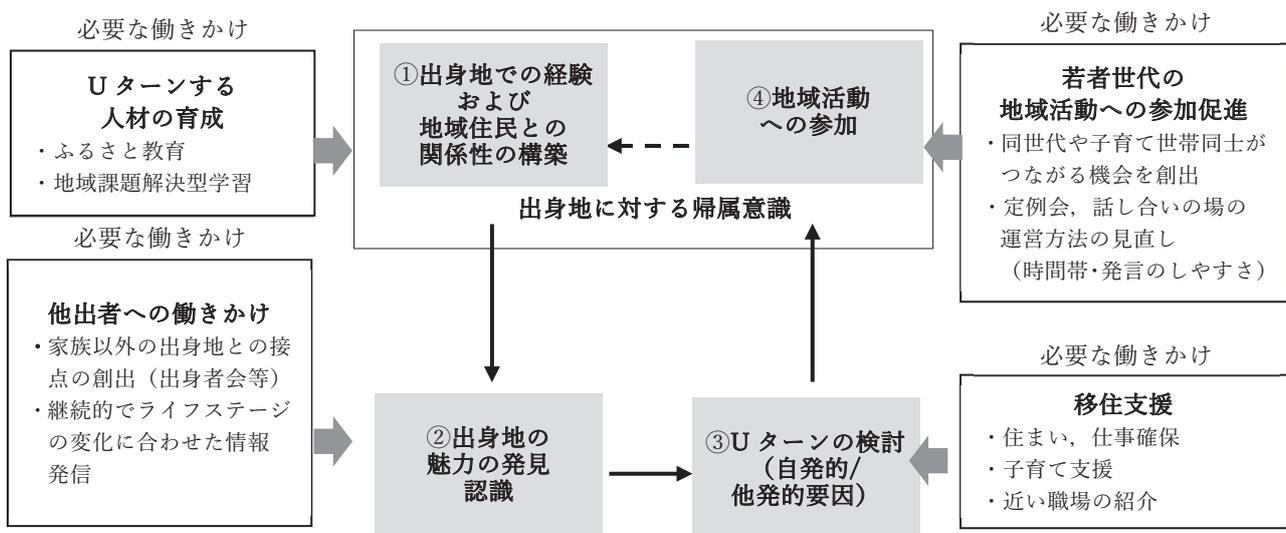


図4 Uターンに至る過程(①～④)とUターン促進に必要な働きかけ

いたこと、経験したことを今の子ども達にも経験させてやりたい」という発言にあるように、大人世代の地域活動への参加の様子は子ども世代に伝わるものである。したがって、大人世代の地域活動への参加は、次世代のふるさとへの愛着や誇りといった出身地に対する帰属意識を形成するための重要な要素であると考えられた。

#### IV まとめと考察

##### 1. 持続的な人材環流に向けて必要な視点

進学・就職を機に他出する者が多い中山間地域において、一度他出した後に戻ってくるという持続的な人材環流の仕組みを構築するためには、図4で示した①～④の一連の過程を意識することが重要であると確認された。こうしたUターンに至る過程が循環して生じるためには、①～④のそれぞれの要素に対して、適切な地域住民や市町村、県からの働きかけが効果的であると考えられた。

##### 2. 出身地に対する帰属意識の形成に必要な条件

社会全体として、少子化、核家族化が進み、価値観や生活様式が多様化している中で、一般的に、社会の傾向としては人間関係の希薄化、地域社会のコミュニティ意識の衰退がみられる。今回のインタビュー調査の中で、自身の他出前の地域との関係につ

いては、「子どもの頃は放課後になると同世代と外で自然の中で遊び、地域の大人が見守ってくれていた」という意見が聞かれた一方、「現在の子供達は自然の中での遊び方を知らない」「顔と名前が一致しない子も多い」といった意見があった。

したがって、中山間地域といえども自然や地域の大人との接点そのものが希薄化しつつあり、子どもは地域で育てる・見守るよりも、子育ては各家庭の責任という認識が強くなり、子どもと地域との関係性が育まれてゆくといった社会の構造が変化しつつある可能性が考えられた。従来は地域で自ずと出身地での自然体験や、地域行事における経験を積み重ね、地域住民との関係性を構築する仕組みができていた。しかし、その仕組みの希薄化が進むことで、地域や自治体におけるふるさと教育や公民館活動の充実による、Uターンする人材を育成する仕組みが今後より重要になると考えられた。

また、大人世代の地域活動への参加の様子は子ども世代に伝わるものであり、今後進学や就職を機に他出する可能性が高い子ども達の出身地に対する帰属意識の形成に影響を与えていると考えられた。

したがって、出身地に対する帰属意識の形成には前述したふるさと教育や公民館活動によるUターンする人材の育成だけでなく、Uターン者を含めた若者世代の地域活動への参加促進という視点も必

要である。具体的には、同世代や子育て世帯同士がつながる機会の創出、地域づくりに取り組む組織の定例会や話し合いの場における発言のしやすさ、参加しやすい時間帯の検討があげられる。

### 3. Uターン促進の条件

Uターンのきっかけづくりとなる他出者への働きかけについて、現状は他出期の情報は家族から得ている場合が多い。したがって、今後Uターンの可能性がある者に対する継続的かつライフステージの変化に合わせた情報発信など家族以外の自治体等による情報伝達の手段を検討することが必要である。

Uターンの後押しとなる移住支援については、Uターン時に実家に居住する者が多いが、兄姉の家族がすでに実家に居住している場合や、三世帯同居を望まない家庭も増加する中で実家以外の住まいの選択肢を用意することもUターンを促進する上で必要な条件である。

### 4. 本研究で残された課題

今回の調査では、川本町のUターン者を対象としたが、より客観性を高めるためには、他出したままUターンしない者への調査や調査対象地を拡げることが今後必要である。

また、地域活動への参加が出身地に対する帰属意識の形成に与える影響については、同一市町村においても地域ごとの差(若い世代が地域づくりに関与している地域、次世代育成に注力している地域とそうでない地域)を確認する必要がある。今後はこれらの課題も踏まえながらさらに研究を深める必要がある。

### 引用文献

- 江崎雄治・新井良雄・川口太郎(1999)人口還流現象の実態とその要因ー長野県出身男性を例にー。地理学評論：645-667。
- 樋田有一郎(2020)地域移動が形成する家族継承者の二重の主体性ー島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通してー。村落社

会研究 26(2)：1-12。

- 小田切徳美(2014)農山村は消滅しない。岩波書店。
- 岡崎京子・後藤春彦・山崎義人(2004)Uターン者増加の過程における転入要因の変遷ー宮崎県西米良村を事例としてー。都市計画 39(3)：25-30。
- 齋藤嘉克・佐藤宏亮(2019)若年層のUターンを促進する要因とその形成プロセスに関する研究ー奄美大島龍郷町秋名・幾里集落を対象としてー。都市計画 54(3)：1424-1429。

山本努・ミセルカアントニア(2018)過疎農山村における人口還流と地域意識ー大分県中津江村1996年調査と2016年調査の比較ー。社会分析 45：135-148。

### その他参考文献

- 島根県中山間地域研究センター(2019)若者世代の定住に向けた新たな視点ー移住・定住から次世代環流に向けてー。令和元年度山陰両県共同研究成果報告書。
- 総務省(2018)「田園回帰」に関する調査研究報告書。
- 内閣府(2008)平成20年度版青少年白書ー特集：家庭、地域の変容と子どもへの影響。

### 注

- [1] 総務省(2018)の調査では平成12年、22年、27年の国勢調査において全国的に移住者数は減少傾向にあるものの、過疎地域において都市部から移住者が増加している区域の数が拡大している傾向がみられるなど、「田園回帰」の潮流の高まりが確認されている。
- [2] 本研究において、Uターン者は進学や就職をきっかけに他出し、その後、他出前に居住していた市町村に戻った者と定義した。また、他出先が県内で戻ってきた場合もUターン者とした。Iターン者は出身地でない居住地を選択し、移り住んだ者と定義した。
- [3] 小田切(2014)は、都市から農山村への移住の3大課題は仕事・住居・コミュニティであるとしている。

[4] 当センターで実施した、島根県、鳥取県の 8 町村の若者世代（20～44 歳）を対象としたアンケート調査結果では、U ターン者が転入時に活用した情報源は「特になし」が最も多く、次いで「家族・親族」が多い結果となっている。

[5] 島根県中山間地域活性化基本条例に基づく。

[6] 先述したように U ターン者は、役場内の移住定住相談窓口を介さず U ターンする者が多いため、調査対象者の抽出は機縁法を用いた。役場に勤務する U ターン者の紹介から各年代の U ターン者を抽出したため、U ターン者の職業については偏りがある。

[7] 半構造化インタビューは、予め質問項目を大

まかに設定しておき、細部に関しては自由度を高くしておくインタビュー調査の形式である。

[8] 山本・ミセルカアントニア（2018）の調査項目では、U ターンの理由 10 項目について、「古里の方が生きがいは感じられる」「都会の生活が自分に合わない」「昔からの友達・知人がいる」「地域から通える職場がある」「親戚が多く生活が安定する」「定年」を「内からの要因」とし、「外からの要因」は「親のことが気にかかる」「土地や家を守るため」「仕事上の失敗や病気」と分類している。本研究でもこの分類を参考に U ターンの理由を「自発的な要因」と「他発的な要因」に分類した。